

第7回揖保川流域委員会 議事録（概要）

日 時：平成15年7月1日（火）9時30分～12時00分

場 所：ホテルサンガーデン姫路 3F 光琳の間

出席者：委員17名、河川管理者2名、傍聴者45名

1. 「揖保川を語り、生かす集い」実施報告

5月に、上流(山崎町)、中流(龍野市)、下流(姫路市網干区)の3ヵ所で開催された「揖保川を語り、生かす集い」の実施報告が、委員長より行われました。

2. 提言(たたき台)について

委員会からの提言について、委員長と3分科会のまとめ役がとりまとめた「たたき台」をもとに、審議が行われました。

審議の結果、たたき台で示された構成を基本として、3分科会(「治水・利水・自然環境分科会」「流域社会分科会」「情報交流分科会」)ごとに執筆を分担し、それぞれのまとめを集約して提言の案を作成することとなりました。

今回の委員会は、引き続き、提言に盛り込む内容について審議することとなりました。

委員からの主な発言(提言(たたき台)の内容は、委員会資料2を参照してください)

< 「 . 流域の特性と現状の課題」について >

揖保川というのは淀川、紀の川、五ヶ瀬川、長良川など他の河川とは違うということ、委員会では揖保川の歴史や文化などをじっくり考え、河川整備計画を作っているということを表すためにも、「 . 流域の特性と現状の課題」は重要になってくる。

これからこの提言が生かされる重要なポイントは、地域住民の方々の参画と協働という流れがなくては揖保川自身が生きていけないという点ではないか。このコンセプトを明確にするためにも、現状の課題を明記し、課題を解決する流れを提言していくという思いを出していきたい。今回の資料に示された「流域全体(直轄管理区間及び支川)の整合性の確保」「上流・中流・下流の整備のアンバランス」「利水施設としての井堰等の整備と河川環境保全の両立」「河川敷の利用と自然環境保全の両立」「内水排除対策」という5項目に加え、揖保川の歴史や、川だけではなく周辺の地域との一体的な保全といった、河川と地域社会との関わりについても「流域の特性と現状の課題」に入れていきたい。

治水・利水・自然環境分科会では高水敷は原則つくらない方向でいくという話が出た。「河川敷の利用と自然環境保全の両立」とするとこれまでとあまり変わらない提言になり、河川敷の利用)を少し抑えてでも自然環境を、という分科会の中での意見をもう少し反映したかたちになればよいと思う。

「 . 流域の特性と現状の課題」に示された5項目を見ると、どちらかという課題の方にウエイトを置いた整理のしかたになっているので、流域の特性というものをもう少し加えていってはどうか。

「 . 流域の特性と現状の課題」は、むしろ現状を主体に書いてはどうか。課題をあまり強調すると、「 . 河川整備に対する基本的な考え方」のところで書く内容とかなり重複することが予想される。むしろ . では、現状がどうです、河川敷はこれぐらい利用されている実態があります、その反面、自然環境でこういう影響が出ていますぐらいの記載にとどめた方が、基本的な考え方のところで委員会としてはどう考えるかというのが強調できるのではないか。

揖保川という川をここで問題にしている以上、基本的には川一般論ではなく、揖保川という川
の特性を中心に裏打ちしてもらいたい。また、歴史絡み、文化絡み、社会と関連する意見が出
ており、それらを提言に注入していけばよいと思う。おそらく人が歴史離れをしている、ある
いは文化と疎遠になっている部分が、結果的には川と人との疎遠を招いている重要な部分では
ないかと思う。それだけに、特性とかかわる部分について、もう少し力点を置いてまとめると
よい。

<目次構成について>

・ ・ ・ ・ と大項目が分けてあるが、「 ．整備計画のあり方」の「自然環境」とい
うのが一つの大きな項目（ ）に上がってもいいのではないか。そして（今の） が になる
というような目次構成はどうか。

「 ．整備計画のあり方」の中で、治水、利水、自然環境とか歴史なども目配りしたような整
備計画にしてほしいという項目が出てくると思う。自然環境を強調するのは簡単だが、それを
整備計画にどう反映したらいいのか、というところにつないでいかなければならない。

<「 ．河川整備に対する基本的な考え方」について>

「揖保川を語り、生かす集い」の結果から、上流部と下流部で同じ意見もたくさんあったが、
違う面もあると思う。やはり地域特性ということを考えなければならない。このまとめは結構
だと思うが、常に上・中・下流の地域性を考えていくという観点に立っていききたい。

「土砂管理」の中に「自然環境の側面から質的土砂管理に重点をおいた整備」とあるが、国土
交通省で過去 20～30 年間の河川の水深を調査し、データを取っているのか。昔の揖保川を知
っている人と話をすると、昔と比べると水深が浅くなり、小砂利がたまり、魚のすむ環境的に
もよくない。これは本来の揖保川の姿ではないと言われる。洪水に対する安全面から土砂を撤
去し、深くしてほしいという意味ではなく、揖保川のよさ、本来川の持っている浄化機能など
をもう一度見直すべきである。昔から地域に住んでいる人の話を聞きながら、深いところをつ
くり、子どもの遊べるような場所もつくるということを入れた上で整備計画を立てていきたい。

「3．揖保川流域のあり方」のところに「流域内の情報発信・共有を実現できる河川整備」と
あるが、主語がないので誰が情報発信するのか、誰が共有するのかがよくわからない。例えば
「自発的情報発信」とか、「地域での情報共有」というふうに書いて、できるだけ主体が明確
になるような記述の仕方が重要であり、それは他のところにも言える。

情報発信の形態として、仕組みをつくれれば発信できるものではなく、各役割が自発的に動かな
ければならないということを明確にしなければかけ声で終わってしまう。仕組みとそれが動く
ような運用の流れを検討する必要がある、というような文言が提言には必要ではないか。

流域社会の観点からの項目立てが弱いのではないか。例えば「河川空間の利用に対する考え方」
を「地域社会との関わりに対する考え方」などとして、地域と川との関係、まちづくりと川と
の関係のようなもの、当然その中には河川空間の利用があってもよいし、もう少し広い都市計
画の中での川とのかかわりというものを入れてもいいのかと思う。

治水、利水、自然環境も、必ず歴史や文化に裏打ちされている。それ（地域社会との関わり）
を「7．河川空間の利用」の中で項目を分けて記述するというのは細かすぎると感じる。それ
よりは や総論の「3．揖保川流域のあり方」に入ってくる方がよい。流域全体のスケールの
規模を、小さい項目で取り上げるのはなかなか難しいと思う。（河川空間の利用は）このまま
でいいのではないか。

「6．河川環境」のところは、治水、利水あるいは河川空間のところと比べると、項目が細か
くなりすぎている。6でも治水のところと同様に「整備水準と目標」ということを掲げたい。
自然環境に対する目標として、皆様が昔よかったと思われる頃、例えば 1960～1970 年あたり
を設定したら、数値目標として、河川管理者が蓄積してきた数字を使って具体的に論を進めて

いけるのではないか。

< 「 ．整備計画のあり方」について >

項目立てに関してはこれでいいと思う。「 ．河川整備に対する基本的な考え方」では概念を示し、あまり細かい話には立ち入らないこととし、「 ．整備計画のあり方」のところでは、かなり具体的な内容も記述するといった意思統一をしておきたい。先程の議論のままいくと、
がかなり細かくなってしまい と内容的に重複する、あるいは執筆者によって とのトーンが異なってしまい、あとの統一が大変ではないかと思う。例えば「 ．整備計画のあり方」で挙げた「氾濫との共存」のところは、これがまさに概念に相当するのではないか。

「氾濫との共存」は、「基本的な考え方」の「治水に対する考え方」の中で、盛り込んでいくべき考え方だろう。

「 ．河川整備に対する基本的な考え方」と「 ．整備計画のあり方」のそれぞれの項目が同じように並んでいることも、メリハリがついてない理由の一つではないか。また、小見出しをつけて、この項では何を言おうとするのかということを書いておいた方が、一般の人が見る場合に非常にわかりやすいのではないか。

「 3 ．自然環境」と「 4 ．河川空間の利用」とに分かれているが、これは一つにまとめて「河川環境」とした方が自然と人とのつながりが表現できるのではないか。

「 4 ．河川空間の利用」には、治水との絡みというのも出てくるので、そのあたりも慎重に議論していくべきではないかと思う。

の議論の中で出された流域の歴史・文化のようなところが、「 ．整備計画のあり方」ではなかなか出にくい。それを入れるとすれば「 5 ．連携による流域管理」のところではないか。できれば地域おこしのような部分、教育に関わる部分(学校教育だけではなくて生涯学習教育と関わる部分)についても、試行的に具体的方策を記入していくとよいのではないか。

今後 20 年～30 年の河川計画を策定していくというのがこの流域委員会の趣旨であれば、工事発注のあり方も見直す時期が来ているのではないかと思う。コンペ方式などでいろいろな案を出してもらい、子ども会の役員さんなども委員になって決めるような事業採択のあり方について盛り込めないか。

「 5 ．連携による流域管理」の「(3) 住民参加の川づくり」というところで、「流域住民の意向が何らかの形で反映される体制づくり」とあるが、これだけでは将来的に弱い提言になってしまうのではないか。やはり直接的な住民参加が個別具体的な事業において必要だということを、もう少し大きく盛り込めないか。例えば「参画することができる体制づくり」といった表現にするべきではないか。

(「何らかの形で反映」の)具体的な提案として、河川整備に関して 1 年に 1 回でもいいから、国あるいは市町村の人たちと一緒に話し合いをする機会が欲しい、といったこともある。例えば、流域住民の皆さんとともに何かをつくっていく、流域住民の皆さんとともに川をつくっていく、そのような表現が欲しい。

「地域社会との関わり」というような見出しをつくってほしい。やはり地域社会の歴史・文化をどう河川整備の中に入れ込んでいくのかということがあり、また、地域の水循環のシステムを構築するにはまちづくりの考え方を見直していくというようなことも必要である。あと、揖保川からまわりの地域づくりに発信するようなものまで提言できればと考える。

< 提言の案のとりまとめについて >

今回の委員会であたき台の全体的な検討を重ねているが、もう一度、3 つの分科会に戻して検討してはどうか。今の論議を各分科会でさらに煮詰め、各分科会の論議でもう少し深めていけばよいのではないか。

各分科会で、ある程度意見は統一されていると思うが、分科会間の意見が統一されているかど

うか難しいところがある。例えば治水・利水・自然環境分科会で、河川空間は自然状態に戻すべきだという意見があって、別の分科会で住民が憩えるような整備をきちんとするべきだというような話があれば、これは完全に相反する意見となる。そうなったとき、提言のたたき台で両方の意見が並列されているのというのは考えにくく、委員会として統一した見解があるべきだと思う。内容についての意思統一は、ある段階で執筆し、全文を皆さんに査読してもらい、そこで意見を集約し、もう一度執筆者に戻して統一を図るといったようなシステムづくり、執筆に向けてのスケジュールづくりというようなことも、十分議論しておく必要がある。

あまり大きく目次の変更はないということであれば、この目次を1つの案にして、の「はじめに」と、の「流域の特性と現状の課題」をどなたかに書いていただく。の「河川整備に対する基本的な考え方」は、できるだけ具体論に踏み込まず、問題をしっかりと捉え、考え方をしっかりと表していくということで、トーンを揃えていきたい。また、タイトルを工夫し、「基本的な考え方」と「整備計画のあり方」は、必ずしも見出しを同一にする必要はないということで、メリハリをつけていきたい。

執筆は、については、治水を道奥委員、利水を田中丸委員、自然環境を浅見委員にお願いしたい。また、「3．揖保川流域のあり方」と「7．河川空間」は主として流域社会分科会にお願いしたい。まず「．河川整備の基本的な考え方」をまとめていただき、それを受けたかたちで、「．整備計画のあり方」についても各分科会でまとめていただく。の「5．連携による流域管理」は情報交流分科会である程度まとめる。と はできるだけ分科会のまとめ役と相談しながら委員長がまとめる。

3．傍聴者からの発言

3名の傍聴者から、次のような発言がありました。

資料には整備計画策定時に住民の意見を聴くと書いてあるが、揖保川流域の市町の行政が協力して動いてくれないと、一般の住民だけがいろいろな意見を出しても仕方がない。単に関心があって傍聴に来ているというのではなく、この流域委員会が揖保川をどのようにしていこうと考えているのかということは、関連市町の関係部局の人は必ず聞いてほしいと思っている。

河川の中に私有地があり牛を飼っている方がいるが、そこでは牛の糞尿がそのまま捨てられている。この私有地は国で買い上げることができないのか。

揖保川流域には何千何百町歩という水田面積があるが、農家、水利管理者、井堰管理者の代表が委員会に加わっていない。そういう方が委員として必要ないという考え方なのか。また、揖保川で流域下水道が供用を開始しているが、それによりどの程度水量が少なくなるかということ、委員会は把握しているのか。

以上